



# 久慈市

すす きょうどう ししん

## まちづくりを進めるための協働指針



 久慈市

令和4年6月

これは、協働ができている地域と、まだできていない地域のある朝の風景です。  
どちらの地域になるかは、私たちの選択次第です。この指針では、協働とは何かをお伝えしていきます。

## ●●●● 協働ができている地域 ●●●●

ごみ袋片手に、日課の散歩に出かける。

おだやかな日差しが降りそそぎ、朝露に濡れた草花がキラキラと反射している。沿道には、地域が整備したプランターに季節の花が咲き、暖かな朝に彩を添える。

市と一緒に点検をしてきれいになった横断歩道では、スクールガードが見守る中、子ども達が元気に登校し、お互いに挨拶を交わしている。盆踊りで一緒に踊ったあの子は、もう小学生になったのか…。目が合うと笑顔がかえってくる。

そんなことを思いながら、地元企業の協力で建てられたゴミステーションにゴミを出す。回覧でゴミ出しルールを徹底してから、ほんとうにきれいに使われている。

地域の掲示板を眺める。  
「朝市やふれあいサロンの案内」  
ふむふむ、今度、地域の環境整備があるらしい。

河川敷を歩きながら、この間の環境整備で、地域外の人達と一緒に遊歩道の清掃をしたことを思い出す。

「今度も来るので、一緒に楽しみましょう」  
そう声を掛けられたことが嬉しくて、思わず笑みがこぼれた。

昔に比べると、地域の方は減った。  
でも、昔と変わらない、いや、  
昔よりも住みやすいまちになった。  
昔よりも地域が明るくなった。

昔よりも、もっともっと地域の事が好きになっている自分がある。

## ●●●● 協働できていない地域 ●●●●

ごみ袋片手に、日課の散歩に出かける

おだやかな日差しにさらされ、くすんだ感じの町並みがあらわになる。沿道には草が生い茂り、歩道と車道のさかいがあいまいになっている。

白線が消えかかった横断歩道を子ども達が急いでわたる。見守る大人の姿はない。市に白線の引き直しを連絡したのはいつの事だったろうか…。すれ違う、知らない子ども達。この地区の子ども達は、こんなに少なかつたらうか…

そう考えながら、古くなったゴミステーションにゴミを出す。ゴミ出しルールを守らないゴミが脇に無造作に置かれている。

使われていない地域の掲示板を眺める。  
最後に地元の集まりに参加したのは、いつのことだったろうか…とぼんやり考える。

雑草やゴミが散乱する河川敷を歩きながら、市は何もしてくれないなあとつぶやく…。かと言って、自分でなんとかする気力もない。

「誰もやる人がいないから やってけでえ」  
あれこれと頼まれることが面倒で、ため息がもれる。

昔に比べると、地域の方は減った。  
時代とともに人との関わりが薄くなり、  
歳とともに出来ることが少なくなった。  
昔はよかったなあ また言葉がもれる。

このままこの地域で暮らしていけるのだろうか。これからの生活に不安を感じる自分がある。

# はじめに

久慈市総合計画基本構想では、まちづくりの基本は、「『人』と『人』、『地域』と『地域』のつながりと支え合いの力が、まちを元気にする」とし、これを推進していくためには、「市民一人ひとりが将来を見据えながら市民協働の取組意識を持ち、共有することが必要」としています。

また久慈市では、地域住民が主体的に地域づくり活動に参加できる環境づくりとして、ふるさと未来づくり事業や集落支援員の配置、市立公民館をコミュニティ拠点の核とするために市民センターに移行するなど、協働による地域づくり活動の支援を行ってきました。

このように、みんなでつながって支え合う“協働”が必要とされていますが、そもそも“協働”とは、どのようなことなのでしょう。どのような取り組みが“協働”になるのでしょうか。

本指針では、まちを元気にしていくための取り組みとして必要となる“協働”の良い点や取り組んでいくために気を付けなければいけないことなど、久慈市における“協働”の考え方や方向性について示そうとするものです。

1. 協働とは	1
2. 協働のねらい	2
3. 協働のパートナー	9
4. 協働を推進するには	12
おわりに	15
【付録】なぜ協働が必要なのか	16

# 01 協働とは



## みんなで力を出しあうことで 幸せをつくる大きな力が生まれること

協働とは、地域や時代の新しい要望・課題を解決するために、さまざまな主体（地縁団体、市民団体、NPO法人等、企業等、教育機関、久慈ファン、行政など）が互いの長所や特性を活かしながら、みんなで力を出しあって協力し、未来の地域の幸せに向かっていく活動です。



# 02 協働のねらい



これからも住み続けたいまちを目指して、“協働”に取り組んでいこうとしたときに、どのようなことを意識していく必要があるのでしょうか。

また、“協働”には、どのような効果があるのでしょうか。  
ここでは、協働のねらいについてお話します。

- ① 活動の目的を共有する 目的
- ② 互いの違いを受け入れる 相互理解
- ③ みんながいい感じになる Win-Winの関係
- ④ 成果を急がない 継続
- ⑤ 変化を受け入れる 柔軟
- ⑥ 関わることで成長する 成長



## ① 活動の目的を共有する 目的

協働は、目指したいゴールは何かという「目的」と、いつまでに何を達成するのかという「目標」を共有し、同じくすることが重要です。

それぞれの主体が参加する動機や意図は異なっても、それを理解しながら、目的や目標を共有することにより、協力しあうことができます。



### おもな意見

策定検討委員会では、「活動に参加する動機や求めるメリットなどは、参加する個々で異なる」などの意見が出されました。

しかし、協働には、「それぞれの立場や動機、求めるメリットが異なっても目指すゴールは同じであること」が重要であるという結論になったことから、目的や目標を同じくすることが重要としました。

## 2 互いの違いを受け入れる

### 相互理解

協働は、互いの違い（得意・不得意、立場や環境、考え方や価値観など）を理解し、その違いを受け入れることが大切です。このことにより、相手との関係が深まり、信頼関係をつくることができます。



#### おもな意見

策定検討委員会では、「協働では、さまざまな主体と関わって活動をしていく。協働する相手の立場やメリットを理解し、尊重しないと協力して活動することはできないのではないか」という意見が出されました。

また、「相手との違いを受け入れることにより、相手の得意なことや苦手なことを知ることができ、知ることによって互いに助け合うことができる」という意見も出されたことから、相手のことを理解することが大切な要素としました。

## 3 みんながよい感じになる Win-Winの関係

協働は、関わる主体それぞれがメリットを感じる事が重要です。だれかがメリットを感じない協働であれば、それは押し付けになります。それぞれが幸せになるような役割分担や進め方、関係づくりが大切です。



#### おもな意見

策定検討委員会では、「協働は、互いにメリットがあることが大切」という考えから、Win-Winという言葉は初めから出されていました。

しかし、Win-Winという言葉は、利益や見返りを求めるというイメージがあることから、ボランティアなどの活動には合わないのではないかという意見も出されました。

検討を深めていく中で、Win-Winは、金銭的な利益だけではなく、活動に参加する人や必要としている人など、協働に関わる全ての人・団体に得るものがあり、幸せになることの意味であると確認をしました。

## 4 成果を急がない

### 継続

協働は、その成果が見えるようになるまで、時間がかかる場合があります。そのため、互いに急いで成果を求めない姿勢と、途中の過程を意識しながら続けることが大切です。



#### おもな意見

策定検討委員会では、「イベントなどの単発の活動は、すぐに成果が見える場合もあるが、本来のゴールから見ると、まだまだ時間がかかる場合がある」という意見が出されました。また、「失敗しても、成果が見えるまで続けることが大事」との意見もありました。

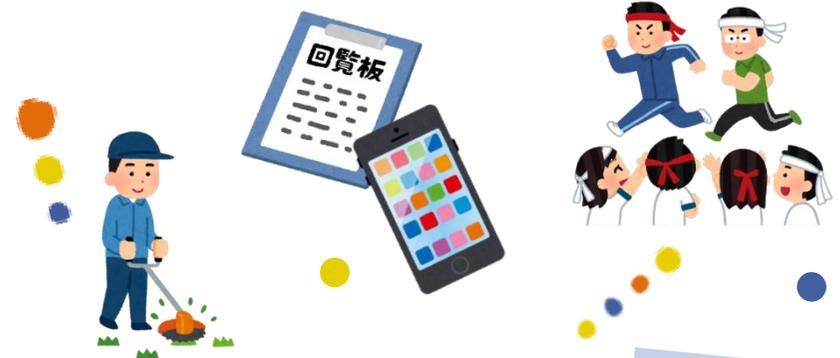
このことから、全ての活動に当てはまるわけではないが、「活動の成果や協働の効果が見えるには時間がかかる場合がある」という認識は必要であると確認しました。また、時間がかかるという前提で、互いにいそいで成果を求めないことも必要であるとしました。

## 5 変化を受け入れる

### 柔軟

協働は、さまざまな主体が関わるため、主体ごとの特徴や新しい考えや発想が出てきます。また、地域や時代の変化により、活動を変えた方が良い場合もあります。

そのため、共に活動する相手と話し合った上で、時には活動の形を変えることも大切です。



#### おもな意見

策定検討委員会では、「伝統や文化など変わらないものもあるのではないか」「活動の形を変えることが必ずしも必要なことなのか」という意見もありました。

しかし、「伝統や文化を残していくためには、今にあったやり方や考え方を取り入れていくこと」「さまざまな主体を巻き込むためには活動の形を変えていくこと」「地域や時代のニーズにあわせて形を変えていくこと」などが必要という意見も出ました。

このことから、状況に応じて形を変えるという考えは必要であるとしました。

## 6 関わることで成長する

### 成長

協働を通じてさまざまな情報や知識を得て経験を積むことで、活動に参加する自分も相手も成長することができます。

そして、活動を続けていく中で、新たに興味を持つ人が現れたり、活動に参加した人の地域愛・地元愛が深まり、将来の地域の担い手が育っていきます。



#### おもな意見

策定検討委員会では、「いろいろな人と交流することで、地域の眠っているお宝や困りごとを知ることができる」「社会の流れを共有することで価値観をアップデートできる」など、情報を知り、それをみんなで共有することで成長をすることができるという意見が出されました。

また、「大人の協働する姿を見せて、子ども達も一緒に体験することで、子ども達が大人になった時に、自然と協働ができるようになる」「活動に参加し、興味を持ってもらうことで、将来の担い手が育つ」など、子どもや周囲を巻き込みながら活動をしていくことで、担い手が育ち、活動が継続されていくという意見も出されました。

## 03 協働のパートナー

協働は、さまざまな主体が関わるのが重要です。

ここでは、おもな主体についてお話しします。

### 1 ちえん 地縁団体

地縁団体とは、その地域の縁に基づいた団体で、町内会や自治会、一定の区域で構成した協議会など、お互いの支え合い・助け合い(相互扶助)を目的として構成されているコミュニティのことです。

また、老人クラブ、青年会や子ども会などの年齢層や対象で絞っているコミュニティも含まれます。

地域の相互扶助を目的としている集まりのため、結束力が強く、活動への参加や継続性に優れていますが、近年の少子高齢化等により、活動の維持が難しくなっている団体もあります。



### 2 市民団体

市民団体とは、ボランティア、スポーツ活動や趣味活動、環境保全など特定の目的のために集まった団体のことです。

特定の目的のために集まっていることから、地域等の枠を超えたさまざまな人達や団体に関わっており、自主性が高く、また、団体によっては専門性も期待できます。

### 3 NPO法人等

NPO法人等とは、一定のテーマをもって活動をする法人格をもった市民団体で、NPO法人（特定非営利活動法人）、一般社団法人、一般財団法人などになります。

特定の目的を達成するために集まり、自主性は非常に高く、また、さまざまな知識や経験があることから、専門性や先駆性を活かした活動の展開が期待できます。

非営利の団体ですが、儲けを出すことを否定しておらず、団体の本来の目的を達成するために利益（収益）を得る活動を行うことがあります。

### 4 企業等

企業等とは、営利を目的として一定の計画に従い経済活動を行う主体で、株式会社などの法人から個人商店などの個人事業主になります。また、特定の業種に携わる企業や個人の会員で構成される業界団体も含まれます。

近年は企業の社会的責任（CSR）として社会貢献活動を実施している企業もあり、地域と共にある企業を目指すところもあります。企業は、専門の知識・技術を持っており、資金力や広報力にも期待できます。



### 5 教育機関

教育機関とは、幼稚園・保育園・こども園などの幼児教育を行う場から、小学校から大学までの学校教育、専門学校や私塾など教育に関わる全ての機関となります。

教育機関では、地域社会と連携しながら未来の創り手となる人を育てて支えていくとし、地域活動の推進や学校運営等に地域を取り込む活動を行っています。

カリキュラムの制限はありますが、活動への参加に期待ができます。

### 6 市外に住む久慈市に愛着がある人

市外に住む久慈市に愛着がある人とは、市外の同郷団体やふるさと大使、久慈市のファンになった人などになります。

市外に居ても久慈市のことを気にかけて、想っている人なので、さまざまな形での協力が期待できます。



### 7 行政

行政は、公平性・平等性を重視し、法や政策・計画に基づいて、さまざまな住民サービスを行っています。

事業実施にあたり、補助金など金銭的な支援はありますが、そのお金は、議会の承認を得て編成した予算になります。予算は年度ごとに編成し、前年度に決定するものであるため、行政からの金銭的な支援を考える場合は、事前に話し合っておく必要があります。

#### ■身近なパートナーとしての市民センター

市民センターは、行政組織のなかでも地域住民にもっとも身近な窓口です。

平成29年に、生涯学習活動の推進に加え主体的な地域づくり活動を支援するため、公民館から市民センターに移行しました。

市民センターでは、地域の取り組みをお知らせしたり、地域づくり活動のプランを地域と一緒に考えたり、誰でも参加できる話し合いの場や各種講座の開設など、地域コミュニティの拠点施設として、地域住民や各種団体が目指す地域づくり活動のサポートを行っています。

# 04 協働を推進するには

ここでは、協働の取り組みを続けていくための仕組みや方法についてお話しします。

## 1 つながる仕組み

協働を始める、または協働の取り組みを続けていくには、さまざまな人や団体とつながっていくことが必要となります。

また、さまざまな人や団体をつなぐほかに、それぞれの活動状況の見える化や制度の説明などの情報発信、困りごとなどを相談する場なども含みます。



例えば！

- 地域のニーズや想いを集め、住民の参加を得ながら活動に結びつける活動を行う、地域コーディネータの設置
- 市民の地域づくり活動を支える拠点や組織となる、市民活動サポートセンターの設置
- 市民センターの活用
- 地域、企業、NPO法人などの活動事例を展示・紹介し、活動のマッチングをする場づくり
- 困りごと相談窓口の設置

## 2 話し合いの場

協働を進めていく上では、互いの想いや考えを話し合う場をつくる必要があります。

話し合いの場は、活動を行っている人同士の場のほかに、地域の困りごとやお宝の活用について出しあう場もあります。

例えば！

- 協働に対する理解を深めたり、地域のニーズや困りごとの解決に向けて話し合う、協働フォーラムの開催
- 地域住民や地域で活動するさまざまな団体が困りごとなどを持ち寄り、課題の共有と解決に向けて話し合う、地域プラットフォームの開設

プラットフォーム：駅のように、さまざまな人や団体が集まり、電車に乗るように、課題解決に共に向かっていく場のこと

## 3 学びの場

協働を続けるには、活動を支える人材や組織が必要となります。また、活動を始めるための1歩を踏み出すため、背中を押してくれる存在も必要となります。

そのため、そういった人材や組織が生まれ、周りを巻き込むための技術や心構えを学べる場が必要です。

例えば！

- 協働について学ぶ、まちづくりアカデミーの開設
- 活動に必要な知識を学べる講座の実施  
〔会計講座、ファシリテート(話し合いを進める技術)講座など〕
- インターネットを活用した情報の発信や受信のための講座  
〔スマホ講座、SNS活用講座、オンライン会議活用講座など〕

## 4 活動資金

活動をする上で、必ずしも資金が必要となるわけではありませんが、活動を継続し、さまざまな主体が関わっていくためには、活動資金を得る(稼ぐ)ことを考えていく必要があります。

例えば!

- 活動に使える各種補助金の情報発信
- 特産物の販売、宿泊事業や観光案内など、地域資源を活用して資金を得るコミュニティビジネスの展開
- 活動に共感する人達から寄付金を集める、クラウドファンディングの活用

## 5 楽しむ気持ち

活動は、やっていこうという前向きな気持ちで実施するだけではなく、必要にせまられて実施するという側面もあります。その活動を嫌々ながらやっていたのでは、活動が続かなくなってきます。

活動を継続していくには、それぞれの主体の特性や長所を活かし、楽しいと思える事を考え実行することが必要です。

また、関わったみんなで楽しく交流することも良いと思います。



例えば!

- 親睦会や慰労会などの開催
- レクリエーションを取り入れるなど、楽しめるような事業の工夫

## おわりに

これからも住み続けたいまちを目指す活動は、必ずしも平坦な道でありません。

時には、負担に感じ、楽しく感じられないこともあると思います。うまくいかず、失敗することもあると思います。

でも、誰かがやっていかなければ、目的の達成はできません。

義務なのか、使命なのか、それは各々の立場や動機により、さまざまだと思いますが、やらなければ進んでいかないし、やっていくことで楽しくなることもあります。

自分や周りの人、関わる全員の幸せを考え、できることから少しずつ、くじけそうな人や悩んでいる人には、声をかけて支え合い、半分は思いやりの心、半分はやらなきゃいけないという気持ちで進んでいきましょう。

## なぜ協働が必要なのか

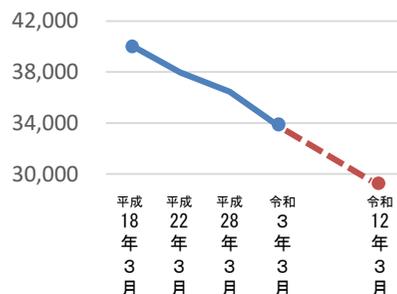
そもそも、なぜ“協働”を考えていかなければならないのでしょうか。  
“協働”の取り組みが必要となっている背景についてお話しします。

### ◆私たちの暮らしを取りまく環境の変化

#### 人口の減少

全国的に少子高齢化や地方から都市への人口流出が進んでいます。

久慈市も、平成18年3月末には40,111人であった人口が、15年後の令和3年3月末には33,713人となりました。



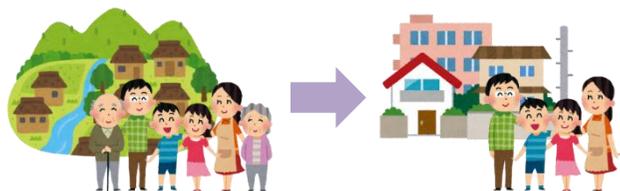
久慈市人口ビジョン(平成27年発行、令和2年改訂)によると、令和12年には、3万人を下まわり、29,909人になると推計されています。

#### 時代の変化

時代とともに家族や生活スタイルは変わってきています。

物や娯楽が少なかった時代は、2世代、3世代の大家族で協力しあい、となり近所など地域で支え合って生活をしていました。

現代は、物や情報があふれ、娯楽や余暇の過ごし方もさまざまになり、核家族や1人暮らしなど家族の形もさまざまになりました。



## いろいろな要望や課題

人口の減少や時代の変化により、地域や個人の要望・課題が多様になってきています。

例えば、地域では、草刈りや防犯・見守りなどの地域活動に参加する人の減少や町内会などの担い手不足による支え合い機能の低下、顔見知りや地域イベントの減少によるふれあう機会の減少、空家の増加による地域環境の悪化などがあります。

個人では、高齢者世帯の介護や買物などの生活不安、子どもがいる世帯の教育費や仕事と家庭の両立、市外に住んでいる人は空家やお墓の管理などがあります。

また、行政においても、人口減少による税収の減や、昔に整備した施設の維持管理・更新費の増大、地域や個人で出来なくなった活動等の行政サービス化、単身高齢世帯の生活支援や共働き世帯の子育て支援、公平・平等を基本とする行政サービスでは対応できない課題の増加などがあげられます。

### 広がる地域の活動

余暇や趣味を自宅で過ごすだけでなく、交流や学び直しなど生きがい活動を充実するため、地域活動に参加する人が増加しています。

また、近年の多発する災害により、町内会・自治会だけではなく、ボランティアやNPO法人などによる自発的な社会活動を行う団体も活発化しています。

さらには、企業においても利益を追求するだけでなく、地域と共に歩み、地域の発展に貢献する社会貢献活動がさまざまな形で行われています。



### ◆住み続けられるまちを目指して

住みやすく、これからも住み続けたいまちを目指していくためには、行政のみ、地域のみで考え活動していくには限界があります。

そこで、住民や行政、NPO法人や企業など、あらゆる人や団体が協力していく、“協働”の取り組みが必要とされています。

## 検討の経緯

協働のまちづくり指針を策定するにあたり、市民と市職員で構成する策定検討委員会を設置しました。策定検討委員会は、各地域で地域づくり活動をしている方、福祉・商工・教育の各団体や公募による市民委員15名と市職員14名からなる計29名の委員で構成されており、令和3年6月22日から令和4年2月16日まで、計5回の委員会を開催しました。

回数	日付	内容
第1回	令和3年6月22日	協働の場面をあげよう
第2回	令和3年7月15日	久慈市の協働を言葉にしよう
第3回	令和3年10月18日	指針に盛り込むフレーズを考えよう
第4回	令和3年11月11日	指針案を考えよう
第5回	令和4年3月17日	指針案をチェックしよう



### 久慈市まちづくりを進めるための協働指針

策定 令和4年6月  
発行・編集 久慈市 総合政策部 地域づくり振興課  
問合せ先 久慈市 総合政策部 地域づくり振興課  
☎ 0194 (52) 2111  
mail matizukuri@city.kuji.iwate.jp